

IV

道徳教育研究グループ

考える道徳の授業と評価

< 研究員 >

千里第二小学校	教 諭	木下 あゆみ
千里第三小学校	教 諭	前田 紀子
片山小学校	教 諭	永井 さやか
東山田小学校	教 諭	鶴田 まなみ
第一中学校	教 諭	寺井 広次
第六中学校	教 諭	森本 満里子

< スーパーバイザー >

大阪教育大学	教 授	金光 靖樹
--------	-----	-------

1. はじめに

小学校に続き、中学校でも今年度から「特別の教科 道徳」が全面実施されました。はじめによる自殺事件などを発端に、子供たちのネット依存、自尊感情の低さ、社会参画への意欲の低さなどが浮き彫りになり、「心の教育」の見直しが急務となったことに端を発するものです。

これを受けて、「特別の教科」として位置づけられた「道徳科の授業」を充実させるために、教科書を使用し、「考え、議論する道徳」への質的改善を図ること、ひいては教員の意識の一層の改革が求められました。移行期間においても、道徳科の授業はどのように変わっていくのか、さまざまな実践事例や研究報告が発表されてきました。吹田市においても、各学校や中学校ブロック等において、今後求められる児童・生徒につけたい力とは何か、授業の進め方はどのようにかわっていくのか、どのように評価していくのかと、目指す授業と評価の在り方について、研究と実践を重ねてきました。

技術革新等の影響により予測の難しい未来に向かって生きていく子供たち。新学習指導要領のもと、わたしたちには、道徳科を要とした学校教育活動全体で指導する道徳教育によって、人間としての在り方を自覚し、他者とともによりよく生きていくための道徳性を養う指導が引き続き求められています。

2. 研究主題及び目的

道徳教育研究グループでは、平成28年度より、大阪教育大学 金光靖樹 教授をスーパーバイザーに迎え、道徳科の授業のつくり方と評価の考え方をテーマに研究を進めてきました。これまでの研究において、「主体的に考えるための発問」と「理解を深め思考を広げる活動」、「展開のポイント」を研究しながら、授業づくりの素材となることを目的とした授業案の作成を行いました。また、振り返りの時間を中心に、児童・生徒の思考の言語化を促したり、自分の納得できる答えの根拠を引き出したりするための効果的な問いかけの言葉をまとめるなど、児童・生徒の個々の考えを認め、励ますための評価活動における授業者の働きかけについても研究を進めてきました。

昨年度の研究成果を引き継ぐ形で、今年度は、児童・生徒への評価活動に焦点を当てていくことにしました。そこで課題として挙げてきたことは、現在行われている評価が、ワークシートを通した「書く活動」による評価中心となっていることです。書く活動によって、児童・生徒の考えを記録としてワークシートに残すことで、その日の授業での考えの変容や大きくりの評価として成長を見取るうえで、貴重な評価材料であることは間違いありません。しかし、一方で書くことが苦手な児童・生徒の評価が難しいこと、「書く活動を学習展開に入れなければ評価できない。」といった「評価のための活動」ともいえる授業にもなりかねません。

そこで、研究グループでは、児童・生徒が「自己を見つめている姿」や「多角的・多面的に考える姿」を授業で観察し評価するために必要なことや、評価材料を得るための視点等を整理することを、研究の主たるテーマとし、教師が児童・生徒のよさや変容をより多面的・多角的に評価することができるよう研究を進めていくこととしました。

3. 令和元年度 研究活動経過

★：金光SVに来ていただいた日

回	月日	曜日	時間	SV	内容
第1回	5月24日	金	16:00		・委嘱
					・昨年度の振り返りと年間活動計画
第2回	6月28日	金	16:00		・年間活動計画
					・2年目における研究の方向性
第3回	7月26日	金	16:00		・研究テーマについて ・評価活動の状況交流
第4回	8月21日	水	16:00		・評価対象となる児童・生徒のワークシートの分析と整理 ・評価につながる学習状況の分析
第5回	9月13日	金	16:00		・評価につながる学習活動を見取る視点とその記録
第6回	10月10日	木	16:00	★	・観察による評価方法及び公開授業に向けての検討内容等について、SVより指導助言
第7回	11月5日	火	16:00		・研究授業及び研究協議の交流 ※可能な限り見学に行く
第8回	11月14日	木	14:30	★	・市内公開授業（千三小 前田教諭） ・SVより指導助言
第9回	12月26日	木	16:00		・1年間の成果と課題の整理 ・報告資料の作成
第10回	1月9日	木	16:00		・報告資料の作成
第11回	1月20日	月	16:00		・報告資料、原稿修正
第12回	1月23日	木	16:00		・リハーサル
教育研究 報告会	1月29日	水	14:00		・報告発表を行う

研究内容及び発信

(1) 道徳科における評価の現状・取り組みと工夫

まず、道徳科の授業で、児童・生徒の何を評価するのかについてです。

「見えない心をどうやって、評価するのか。」という議論はありましたが、「道徳性」そのものを評価するものではありません。道徳的な成長の様子、「学習状況」を評価するとされています。学習状況から、考え方の広がり、深まりを知る手掛かりとして、ほとんどの授業でワークシートなどに書かせる活動、発言を板書に記録していく方法がとられています。1コマの授業で評価するのではなく、学期、年間を通して変容を見取ることや、取り扱った内容項目を通しての人間としての深まりを表す状況からとらえるために、ポートフォリオや道徳ノートを使用して積み上げていく方法がとられています。

授業の終末に書く活動を取り入れ、学びの成果の中心として、授業後に分析することで学習状況を判断することが一般的です。児童・生徒が振り返りシートに記入した内容は学習状況の表れです。ただし、書いたもの全てが評価できる内容であるとは限りません。

注目すべき点は、文の書き出しや結びの言葉です（参考資料1参照）。例えば、「今まで・・・」や「～というところが変わりました。」という結びからは、授業を通しての考えの変容があったことが見とれます。「これから・・・」という書き出しからは、自分なりの発展の見通しを見とることができます。また、「～の意見を聞いて・・・」には、他者の発表や話し合いの中で影響を受けたことを判断できます。変化の対象は教材に登場する人物の場合もありますが、こうした記述からは、他者への共感や他者理解の意味合いが表れています。「自分だったら・・・」という書き方は、自分の今の姿に引き寄せてとらえた自我関与の面が表れています。

(2) 書く活動による評価活動

振り返りシートなどに児童・生徒が書いた文章が道徳性の変容ととらえることが難しい内容であり、評価材料にできない場合があります。どうしてもそう思ったのかといった理由に当たることが書かれていない場合等、評価材料としての判断が難しいとき、授業者の問いかけ、聞き取りを行うなどの手立てが必要です。低学年であっても、「何がすごいと思ったのかな。」というような自分の考えを深掘りさせる言葉かけによって、「なぜかという、…」と根拠を書き出すきっかけとなります。書く活動だけに限らず、授業中の発言内容に対しても同様です。児童・生徒の発言内容に対して、「それはなぜですか。」「そうすると、どうなるのかな。」と問いかけ、深掘りをさせることが大切です。

(3) 観察による学習状況の把握

ア 評価材料の収集

授業中に発言できる児童・生徒、自分の考えを書きことができる児童・生徒に対しては、その内容に働きかけることで、評価材料として集めることはできます。

しかし、学級の中には、必ず書くこと・話すことが苦手な児童・生徒がいます。そのため、必要になってくるのが、観察による評価材料の収集です。例えば、教師からの提案に対して挙手する、ネームプレートを用いて図に示す、思考の動作化といった様子、子供

同士のやりとりや、問いかけに対して表情が変わる、うなづく、つぶやくといった意図せず表出される様子、また、聞く姿勢の変化も観察によって捉えることができます。こうした様子から、「なぜ、どうして。」と働きかけ、考えや思いの表出を促します。

イ 観察によって評価するために、授業準備段階で考慮すべきこと

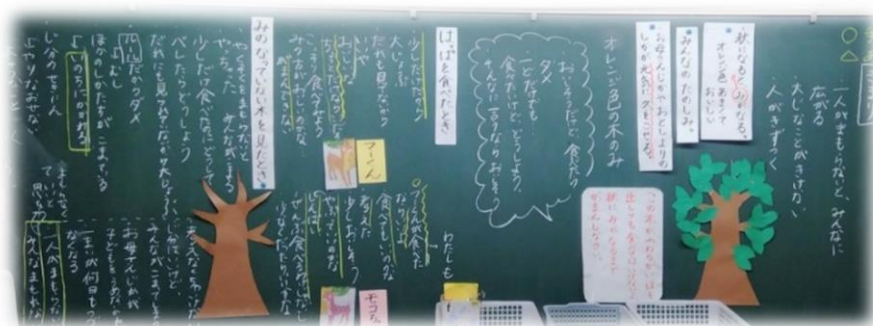
そこで、観察による評価活動に研究活動の焦点をあて、観察を通して評価するために、研究グループでの授業公開を行ううえで、授業づくりの段階から考慮すべきこととして、以下の4点を挙げ、重点的に検討しました。

- (ア) 観察する児童・生徒を焦点化する。
- (イ) 導入段階での十分な理解を促す手立てを図る。
- (ウ) 話し合い活動で、テーマや人数等の環境を適切に設定する。
- (エ) 挙手や問い返し等、児童・生徒が個々に意思表示する機会を設ける。

(ア) はクラス全員を授業者一人が観察で評価することは経験上難しいと考え、設定した視点ですが、(イ) ～ (エ) は、状況把握や内容理解ができていない授業で、児童・生徒の学習状況の変容を評価することはできないことから、その時々を考えや理解の状況が表出される場面を授業者が意識するために、考慮すべき事項として挙げました。

ウ 『道徳教育研究グループ 公開授業』（参考資料2 参照）

教材『オレンジ色の木のみ』（小学校2年 C - (10) 規則の尊重）のあらすじを紹介します。鹿のマークくんは、仲間の鹿たちが冬をこすために大切にしている、実がなる木の葉を、食べてはいけないという「群れのきまり」を守るように言われます。しかし、「少しだけなら…」と食べてしまいます。やがて、友達も一緒に「少しだけなら…」と食べるようになったため、すべての木の葉がなくなってしまいました。冬になり、木の実を求めて仲間たちが木に集まったときには、オレンジ色の木の実がその木になることはなかった、というお話です。守らなければならないきまりだということはわかっていましたが、「少しだけなら…」と破ってしまう心の弱さが主人公のマークくんを通して描かれています。



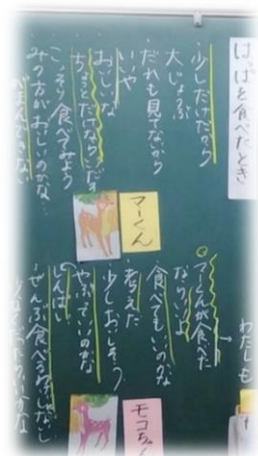
観察の対象として、焦点をあてた児童は、書くこと、話すことが苦手で、スモールステップで言葉を聞き出すような働きかけが必要な児童です。また、動物に興味を示しやすい、本時の内容にも関心高く取り組めると予想されました。

導入段階で、児童の読解力のハードルを取り除くため、範読の前に、教材のあらすじ、

中心人物、問題となる場面をあらかじめ説明し、注目する場面の焦点化を行いました。そのうえで、範読後、授業者が場面整理を板書等で行いました。また、状況を理解するために、具体物を準備することも効果的でした。事前に実施した授業では、児童が、葉が全てなくなることがどういう状況なのかを理解しきれないまま授業が進み、授業の主題に迫ることができない状況が確認できました。葉がなくなる、すると木に実ができなくなり、鹿たちは栄養がとれず冬を越せないというように、理科学的な内容の説明を具体物の操作を通して、大変なことが起こった、危険な状況だということを理解させることで、過ちの大きさについてのとらえを大きく変えることができました。



次に、話し合い活動を設定するにあたって、話すことが得意な児童以外にも話す機会を確保するために3人程度のグループにしました。伝える必然性が高まったことにより、意見交流の姿を観察しやすくなったと感じました。それから、語り合うことができるようにするためには、聞き手の育成が必要です。話を聞きながらうなずける、わかったことや難しいところを伝えられる「聞き上手」が、話し手の話したい、聞いてほしいという安心して話せる環境が生まれます。道徳科における話し合いの目的は、自分自身の考えの根拠を深めたり、多様な考えに出会い、見方・考え方を広げたりすることにあります。「話し合って一つの考えにまとめること」ではありません。授業者が、一見理屈のとおった答えととらえられる発言に対しても、「本当にそうなの。」「ちがう考え方もできるんじゃないかな。」などの授業者の問い返しでさらなる話し合いの必然性を生み出すことができます。



そして、意思表示のスマールステップとして、授業で出てきた多様な児童の考えを選択肢として選ぶ機会を多く作りました。

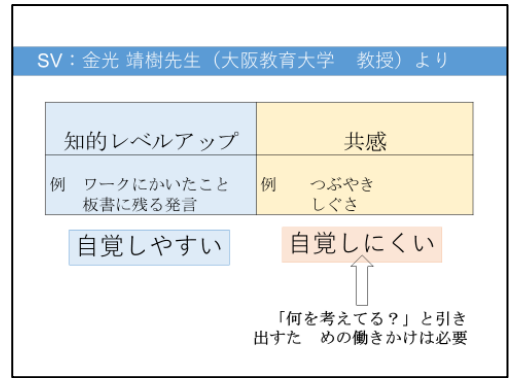
授業の中で板書に数種類の考え方を整理したうえで、それらを選択肢として、「どの考えに近いのか」と問うことで、クラスの友達の手を借りて、考えを表明することができます。また、机間指導の中で、個別に支援するとき、児童・生徒が、はい・いいえで答えられる問いかけを考えておき、その返事に「どうしてかな。」と考えを言語化するための支援につなげることもできます。

このような形で、授業づくりを行うとともに、(ア)～(エ)のポイントから授業を参観し、児童の姿を観察してきました。

(4) 金光靖樹SVによる指導助言

ここで、授業実践をとおして助言いただいた金光先生のお話を紹介します。書く活動や話す活動、そして、観察でとらえた学習の様子を評価のエビデンスとして児童・生徒に返していくわけですが、研究グループの中で、評価を受け取る本人にその内容の自覚がなくても良いのかという疑問がありました。それに対して、御説明いただいたのが、観察による評価は、本人に自覚がない場合も多いことから、「きっこう思っていたらう。」という推測だけで評価するのは難しくなるということです。そこで、学習状況から見とることができる変化を大きく分けると、「知的レベルアップ」と「共感」の二つとし

て分けて整理します。「知的レベルアップ」は、ワークシートに児童・生徒が残すことができるもの、授業者が板書に記録できる内容レベルのものであり、児童・生徒の自覚しやすい内容です。一方、「共感」は、つぶやき、態度、しぐさ等、言葉に残りにくい様子であり、本人の記憶に残らない、自覚しにくいものです。本人が自覚していないことを褒められるほうが、自覚している場合よりも自尊感情が高まる場合がありますが、「どうしてかな？」と理由の確認を聞き取るなど、自覚を促す働きかけが大切だと教えていただきました。



ウ 検証結果

以上を踏まえて、授業に向かう段階から評価活動のことも含めた準備を行うことで、焦点化した児童に対する観察による評価を行うことができました。気づいたことを座席表に書き込んだり、発言は○、聞くときの様子については□と特別な記号を利用して記録したりすることも試みましたが、授業を行いながら複雑な記録をとることは困難でした。観察する児童の焦点化ができていれば、特別な道具を用意する必要はありません。

4. おわりに

観察の視点を考えることは、児童・生徒理解の面からも極めて重要と考えます。また、授業参観の際にも、視点を共有できれば、評価材料を授業者へ提供することが可能です。今回の授業でも、見とることができなかつた部分もあるかと思いますが、参観者が同様の見とる視点を持って参観することで、授業者にとっても有効な情報提供となります。さらに、評価の妥当性・信頼性の強化が図られます。振り返りシート・発言記録・観察など複数の評価材料を組み合わせることになりますが、むやみに作業量を増やすのではなく、学校でどのような評価を行うか共通理解を図り「線引き」を行う必要はあります。

評価を意識することから、子供の良さを見取ろうとする意識が変わっていくことで、授業展開が変わってくるのではないのでしょうか。考え議論する場面で児童・生徒が表現し表出する姿を認めていくことは、成長を認める視点の変化につながります。「特別の教科道徳」として位置づけられた変化の時期にこそ、評価から、指導を変えていくことを実感することができましたので、引き続き実践を重ねてまいります。

<参考>

- 文部科学省 教育課程企画特別部会 論点整理
- 文部科学省 小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編
- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編
- 文部科学省 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議
「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）
- 学 研 みんなのどうとく

授業後に整理する、評価につながる「記述」(書き出し、つなぎ言葉、文末)

	自己を見つめる (「自己の生き方について考える」を含めて)	多面的・多角的に考える
共感	<ul style="list-style-type: none"> ・自分も～のとき、～だった ・これから〇〇のように、～したいと思った。 ・これからも〇〇を大切にしていこうと思う。 ・自分も〇〇しているから、続けていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は～と思ったが、～という〇〇さんの意見も納得できた。 ・他の人の意見を聞くと、納得できる意見がたくさんあった。 ・〇〇さんの意見を聞いて、そんなことも考えられるかもしれないと驚いた。
疑問・葛藤	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は～だから、〇〇のようにはしないと思う。 ・～することだけが〇〇だということではないと思った。 ・自分一人で～するのは難しいかもしれないけれど、誰かと協力して〇〇することができたら良いと思った。 ・〇〇(登場人物)も、〇〇したらいいのにと思った。 ・～するのはいいが、実際に自分はできないかもしれない、悩むと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お話の中の〇〇にとっては～と思ったが、△△は～と思ったかもしれない。 ・もし、～のとき～ふうに言っていたら、～になっていたかもしれない。 ・相手の意見を聞いてなるほどと思ったが、自分はやはり～だと思う。
価値理解	<ul style="list-style-type: none"> ・～から、〇〇(ねらい)の大切さ(良さ)がわかった。 ・今まで、こんな経験はなかったけれど、一度〇〇について考えてみるととても難しいと思った。 ・今回の授業を機に、〇〇を大切にしようと思う ・〇〇とは、～すべきことだと自分は思う。 ・今回の授業で、～のように自分から行動することが大事だと分かった。 ・～(良くないこと)が当たり前の学年(クラス)だとだめだと思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんのように考えることもできるなと知った。 ・〇〇さん[他のみんな]の意見を聞いて、いろんな～があると知った。 ・自分とみんなでとらえ方が違う人も似ている人もいるということが改めてわかった。 ・色々な考えがでたので、〇〇(価値)は、〇〇だということ新たに発見した。(気づいた。)

授業者 千里第三小 前田紀子 教諭

1. 対象学年	2年		
2. 主題名	C 規則の尊重		
3. 資料名	オレンジ色の木のみ (出典：みんなのどうとく 2年)		
4. 資料分析	(1) 中心人物	マーくん	
	(2) 助言者(的)事件	いる	実のなっていない木
		いない	
		原動力	
(3) 中心場面	実のなっていない木を見たとき		
5. ねらい	みんなの必要なものを大切に、他人に迷惑をかけずに生活することがより良い生活につながることに気づき、約束やきまりを守ろうとする態度を養う。		

6. 発問展開

授業展開 【時間(分)】 ・学習活動	発問	児童・生徒の反応予測
導入 【7】 ・資料のあらすじと登場人物をとらえる ・範読をさく	本時で考える価値を示す 「きまりを守ることは大切でしょうか。」 中心となる場面を板書に整理する (木に実がなる仕組みと冬をこすということの意味を確認する。) 教師の範読	<ul style="list-style-type: none"> みんなが気持ちよく過ごすために大切。 ないとけんかが起こる。
展開 【3】 ・マーくんの葉を食べる前の気持ちを考える 【7】 ・マーくんやモコちゃんたちの葉を食べているときの気持ちを考える 【15】 ・事の結末を見た、マーくんたちの気持ちや分かったことについて考える ・きまりの意義について考える	<u>主題にむかう</u> 「葉を食べてはいけないというきまりを聞いたとき、マーくんはどう思ったでしょう。」 「マーくんやその友達、葉っぱを食べながら、何を考えたでしょう。」 <u>補助発問</u> 「モコちゃんがしばらく考えていたとき、何を考えていたでしょう。」 <u>主題にせまる</u> 「マーくんやモコちゃんたちは、実のなっていない木を見て、何を考えたでしょう。」 <u>補助発問</u> 「マーくんたちはどんなことが分かったでしょう。」	<ul style="list-style-type: none"> きまりだから守ろう。 守らないと怒られるよ。 ちょっとぐらい大丈夫じゃないかな。 おいしいな。 自分だけなら大丈夫。 少しだからばれないよ。 <ul style="list-style-type: none"> きまりをやぶっていいの。 大丈夫かな。 マーくんがしているし、いいよね。 <ul style="list-style-type: none"> ごめんなさい。 だからお母さんたちが言っていたきまりがあったのか。 少しのつもりだったけど、それが村のみんなに迷惑をかけたんだ。 小さなことが大きなことになってしまった。
終末 【10】	<u>自己と向き合う</u> 「きまりを守ることについて分かったことを書きましよう。」 感想	